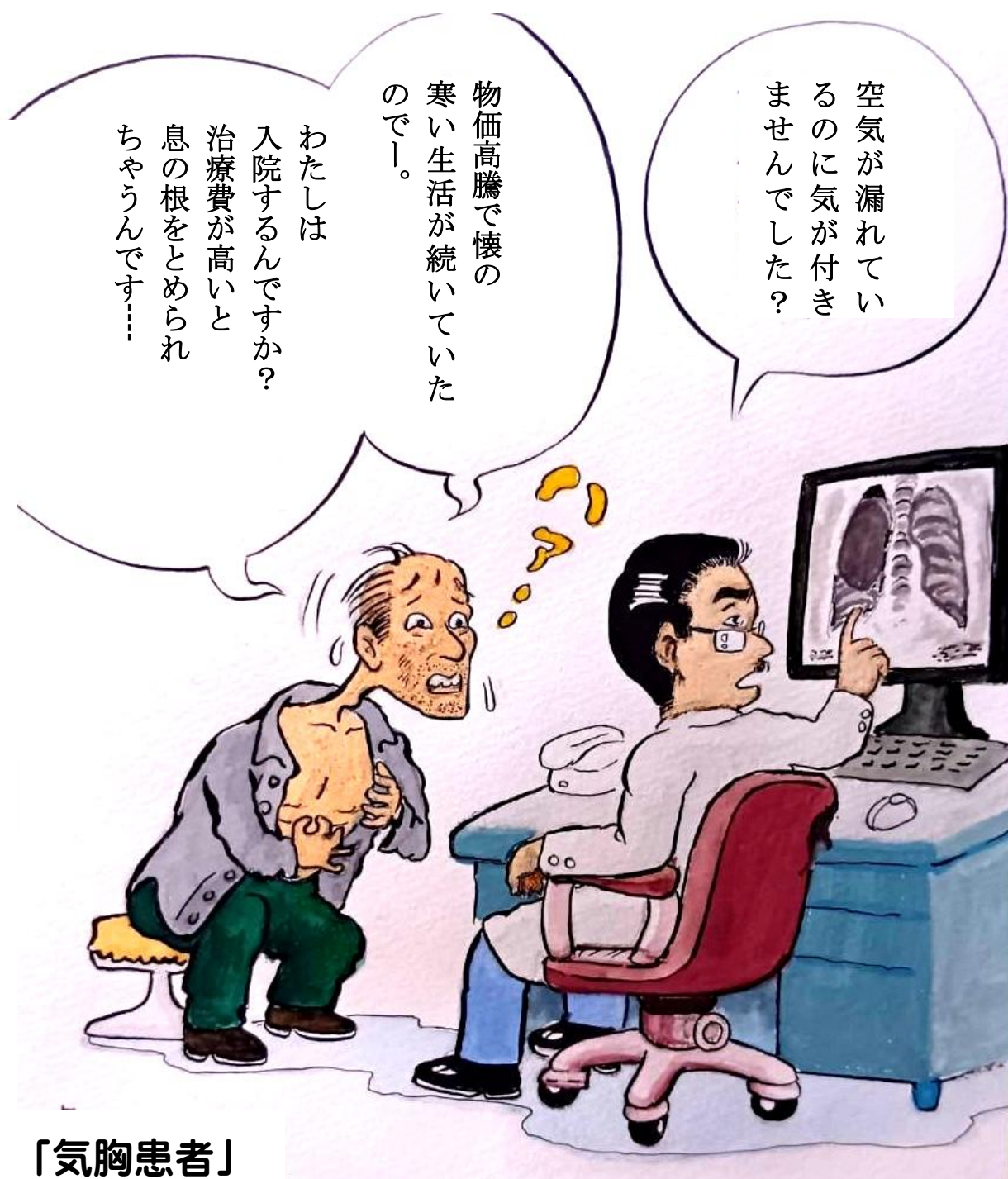


# 月刊 JMITU ティーヌカ



「気胸患者」

11月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2025 年発行

No.491

# 2025年秋闘・年末一時金要求回答 要結の方向へ

私達労働組合（JMITU）

秋闘・年末一時金要求に対し以下回答がありました。

## セガ回答

冬季一時金

（一般正社員（Lp格以下）

基本給2ヵ月分

一人平均 70万6099円

支給額＝基本給×2ヵ月×等

級別個人評価係数（別表1）

支給日12月5日（金）予定

その他の要求事項には応じられない。

別表1. 等級別個人評価係数

評価	S	A+	A	B+	B	B-	C
係数（一般正社員）	1.20	1.10	1.05	1.00	0.95	0.90	0.80

会社「業績は超絶好調ではない、決算良ければ、夏の賞与で調整する。今回要求事項ではないが、会社としては人事制度アップデットを考えている。報酬制度のところをいじろうと思っている。

年が明けてから説明を行う予定。今回一部意思を固めているものがあるベースアップを、定額で13,000円のベースアップを考えている。2年前に行っている賞与の一部を月給に持ってきたのと同じく、1ヵ月分相当を考えている。会社のコスト的には変わらない。

社員の月額給与が上がる。

セガは、全社集会があるそこで社長の話に今のことが含まれている。物価が上がっている。セガの給料水準が低いとは思っていないが、これだけ物価が上がってきている中で、特に給料の低い方に影響が大きいので、ベースアップを会社としては考えている。

ベースアップは重い決断で簡単なことではないが、世の中社会を見て、会社として責任を果たすという意味、一人一人が役割責任を果たし貢献してくれなくては困る。

現在、ステージ制20ポイントたまると1ステージ上がる。定期昇給をなくしているのだから、ステージが上がらないと給料が上がらない、ステージを細かく

く細分化20ポイントを10ポイントで1ステージが上がるようにする。これにより、評価が良いのにステージが上がらないという事を無くしていきたい。実施は、ベースアップとステージ変更、同じ4月1日で考えている。

ボーナスを月給に組み込むと、毎月の収入が安定し生活設計が容易になる利点があります。ローン返済や家計管理もしやすく、従業員の安心感につながります。しかし一方で、月給が増えることで社会保険料や税負担が上がり、手取りが減る可能性があります。ボーナスは今までも業績によつて変動する部分もあり、不安定要素がありますが、まとまった収入が入るのが利点です。どちらが良いのかは、個人の考え方なのかもしれない。

# SLS回答

冬季一時金

(一般正社員(MS格以下))  
係数 2.00

一人平均 71万223円

支給額=資格別基準額(別表1)×2.00+人事評価額(別表2)

支給日12月5日(金)予定

その他の要求事項には応じられない。

傷病有給については、SOJより資料頂き検討中。

会社的には通期でのBPなので超えた分は、年末一時金ではなく、期末のインセンティブを出す。

別表1 賞与資格別基準額

	資格別基準額
MS2	220,000
MS1	200,000
A2	160,000
A1	140,000

支給額=【資格別基準額(別表1)+こども手当】  
×2.00+人事評価額-勤怠評価額

人事評価額=評価ポイント単価×個人評価ポイント  
(別表2)

別表2 賞与評価ポイント

評価	4	3	2	1 (標準)	0	-1	-2
MS2	260	230	200	170	140	110	80
MS1	215	190	165	140	115	90	65
A2	180	160	140	120	100	80	60
A1	160	140	120	100	80	60	40

## 火事は何処？

仙洞田一彦

自転車に乗れるようになってからの事だから、十数年経つだろうか。消防自動車のサイレンが聞こえると、家の脇にある自転車を引き出して、火事場へ走って行った。まず空を見回して、火が見えればそちらの方へ行き、見えなければサイレンの音のする方へ走った。

ひよつとするとそれは、鬱屈したものを上手に吐き出せない、彼の性格に起因しているかもしれない。

学校に通っているときサイレンが聞こえると、本当は教室を飛び出したかったが、そこまではしなかった。卒業し

会社勤めを始めたなら、もっと自由がなくなった。でも夜は自分の時間、自由な時間だ。

親と暮らしていたころ、サイレンが聞こえ、玄関から飛び出そうすると「気をつけろ」と父や母から声が掛かった。「行くな」とは言わなかったし、手を捕まえられることもなかった。

初めのころは「どこへ行く」などと言われたかもしれないが、忘れてしまった。そのうち、家に帰ると「どうだった」と聞かれるようになったから「うん」とだけ返事をした。もしかすると以前は、時によつては詳しく火事の話をしたこともあるかもしれない。それも忘れた。居間で炬燵にあたっているとき、サイレンの音がすると、向かいに座

っている父や、ななめ隣に座っている母の視線が、彼に向いた。彼は炬燵から出ると、綿入れ半纏を羽織ったまま、居間を飛び出した。

両親の視線も初めのうちは、彼の所作をいちいち見守るように動いていたが、後にはチラッと視線を走らせるだけになった。

彼は友達付き合いがなかった。学校ではおとなしい生徒として見られていたのではないだろうか。自分の評価を親に聞いてみることもなかった。おそらく両親は、彼が唯一活動的になる、サイレンの音で飛び出すことは容認していたと思われる。彼の生活の様子から、消火活動を手伝うことは考えられなかったし、消火を邪魔するようなことも考え

られなかった。

就職し、給料をもらう様になったら、家からさほど遠くないところにアパートを借り、独り暮らしを始めた。彼なりに親に迷惑をかけていると思つたかもしれない。夜、早い時間ならいいけど、夜中や早朝に飛び出すのは両親に悪いと思つていたかもしれない。

木造二階建てアパートの一階の狭い部屋を借りた。

ある晩、寝静まるころサイレンの音が聞こえた。彼は布団をはねのけて、パジャマのズボンの上から、外側が防水、内側が防寒仕様になっているズボンを重ね穿きし、綿入れ半纏を羽織り、マフラーを首に巻いて出た。自転車はいわゆるママチャリだ。やや上を見て首を回したが、火は見え

ない。サイレンで大体方角はわかる。十分も走らせたなら、消防自動車は何台か止まっていた。消防士が付近を動き回っている。人が近づけないように、警察官が通行止めをしている。その一番前に出て現場をみたが、火は見えない。だが、家の壁が黒く焼け焦げている様子だ。近くの道路が水浸しになっている。火事だったことは間違いないようだ。彼はやや呆然とし、その場に立っていたが、自転車を止めてあるところまで引き返し、自転車に乗った。モヤモヤし、すつきりしない気持ちを抱えたままアパートに戻った。それから一ヶ月ほどだったか、寒さが増した晩、サイレンが聞こえた。防寒防水のズボン、綿入れ

半纏、マフラーをし、飛び出した。先日と違い、炎が勢いよく夜空に上がっていた。彼は人が変わったように、威勢よく自転車をこぎ出した。炎を見上げる目は、輝いていた。普段は会社の上司から話し掛けられても、ウンだかスンだか分からない態度だった。だから仕事を命じた上司は、「分かったな」と彼に念を押す。上司によつては「分かったな。分かったな」と繰り返す。注視していなければ動きが分からないほど、耳を済ませ彼の口に近付けなければ分からないほどの動きと声で彼は頷く。仕事はきちんとするから、上司もそれで良しとしていたようだ。今は違う。仮に彼の自転車の前に立ちはだかるものがい

ても、自転車ごと体当たりしそうな勢いだ。現場に着いた。規制線が張られているから近付けない。仏像の背にあるような炎が、家がちょうどその仏像のように炎に包まれている。彼が凝視を初めて数分後、家の芯を支えている柱に火が回ったのだろう。バリバリと音が聞こえて家が崩れた。火の粉が舞い上がる。数日後、その家が、両親と親戚同様の付き合いのある人の家だと、言われて気付いた。会社帰りの途中うちに寄った時、

さんの顔も浮かんだ。おいしいケーキを食べさせてもらったことも思い出した。気付きを隠して「うん」と返事した。父も、母も、彼に視線を向けたが、何も言わなかった。彼の脳裏に、炎で家が崩れ落ちる光景とともに、ヤッターというような爽快感とも、達成感ともつかない、何とも言えない感情が走ったのを思い出した。しかし、その後、サイレンの音で、彼が家を飛び出すことはなくなった。今は、インターネットにはまっているようだ。この間の選挙で急伸した排外主義の党は、彼の推しだった。そういえば、インターネットの世界にも「炎上」という言葉があるようだ。